

# 「交換価値」を労働に還元する 論理の難点

——マルクス価値論の批判 (1)——

金子 甫

## 目 次

- 〔1〕 各商品と交換される他の諸商品は「ある内実の現象形態」か？
- 〔2〕 「幾何学上の例」に表わされている推論原則
- 〔3〕 「労働生産物」を捨象しないで「使用価値」を捨象する根拠
- 〔4〕 「商品体の使用価値を無視する」と、「交換価値」は「労働生産物」に転化し、「労働生産物」はその「価値」に転化するか？
- 〔5〕 「使用価値」は「商品体自身」を意味すると同時にその「有用を性質」を意味するか？
- 〔6〕 「労働の諸形態の違い」の捨象は「労働一般」の抽出であるが、「使用価値の違い」の捨象は「使用価値」一般の捨象か？
- 〔7〕 同質の「価値」が「質的に異なる使用価値」という具体的諸形態をとるか？
- 〔8〕 異なる生産者の労働の質的な違いは「有用な諸形態の違い」に帰着するか？

### 【1】 各商品と交換される他の諸商品は「ある内実の現象形態」か？

マルクスは、各商品と交換される一定量の他の商品を、各商品の「交換価値」と呼び、このことにもとづいて、各商品の「交換価値」は、各商品に含まれている「ある内実」の「現象形態」であるという命題を導きだした。彼は言う。

「ある一つの商品、たとえば1クォーターの小麦は、 $x$ 量の靴墨、または $y$ 量の絹、または $z$ 量の金などと、要するに他の諸商品ときわめて異なる割合で交換される。したがって、小麦は、ただ一つの交換価値の代りに種々の交換価値をもっている。しかし、 $x$ 量の靴墨も、 $y$ 量の絹も、 $z$ 量の金なども、1クォーターの小麦の交換価値であるから、 $x$ 量の靴墨、 $y$ 量の絹、 $z$ 量の金などは、たがいにとり代わりうる、またはたがいにより等しい大きさの諸交換価値であるはずである。したがって、第一に、同じ商品の有効な諸交換価値は、ある同じものを表現しているということになる。しかし、第二に、交換価値は、一般に、それとは区別しうるある内実の表現方法、『現象形態』でありうるにすぎない。」（『資本論』Bd. I, S. 41. 岩<sup>(1)</sup> 77頁）<sup>1)</sup>

ここでは、マルクスは、1クォーターの小麦が $x$ 量の靴墨、または $y$ 量の絹、または $z$ 量の金などと交換される場合、「 $x$ 量の靴墨も、 $y$ 量の絹も、 $z$ 量の金なども、1クォーターの小麦の交換価値である」と言い、この見解を根拠として、「 $x$ 量の靴墨、 $y$ 量の絹、 $z$ 量の金などは、たがいにとり代わりうる、またはたがいにより等しい大きさの諸交換価値である」と言っている。すなわち、彼は、ある商品と交換される一定量の他の商品を、ある商品の「交換価値」と呼んでいるのである。だから、彼は、ここで事実上、「交換価値」を定義していることになる。この事実上の定義によれば、「1クォーターの小麦の交換価値」は、小麦自身の性質ではありえないということをして、これからの議論のために確認しておきたい。もし、「1クォーターの小麦の交換価値」が、小麦自身の一つの性質、たとえば $x$ 量の靴墨と交換されるものという小麦の性質を意味するならば、 $x$ 量の靴墨自体は「1クォーターの小麦の交換価値」ではなく、したがって、「 $x$ 量の靴墨も、 $y$ 量の絹も、 $z$ 量の金なども、1クォーターの小麦の交換価値である」と言うことはできないはずであろう。

したがって、「 $x$ 量の靴墨も、 $y$ 量の絹も、 $z$ 量の金なども、1クォーターの小麦の交換価値である」という命題は、事実上、1クォーターの小

1) Karl Marx, „Kapital“, Dietz Verlag Berlin, 1953, Bd. I, S. 41. 向坂逸郎訳『資本論』岩波文庫版、第1分冊、77頁。以下でも、上のように略記する。訳文責は引用者にある。なお、原文のイタリック体はとくに表示しない。本稿における引用文中の上つき力点は、とくに断わらないかぎり引用者によるものである。

麦が「 $x$ 量の靴墨, または $y$ 量の絹, または $z$ 量の金などと……交換される」という命題を言いかえたものにすぎない。だから, 「 $x$ 量の靴墨も,  $y$ 量の絹も,  $z$ 量の金なども, 1クォーターの小麦の交換価値である」という命題から導きだされうる命題は, 1クォーターの小麦が「 $x$ 量の靴墨, または $y$ 量の絹, または $z$ 量の金などと……交換される」という命題から直接に導きだされうるはずのものであろう。

さて,  $x$ 量の靴墨も,  $y$ 量の絹も,  $z$ 量の金なども, いずれも1クォーターの小麦と交換され, その意味で「1クォーターの小麦の交換価値である」ということから, 「 $x$ 量の靴墨,  $y$ 量の絹,  $z$ 量の金などは, たがいにとり代わりうる, またはたがいに等しい大きさの諸交換価値である」という命題がなぜ導きだされうるのか?なぜ,  $x$ 量の靴墨,  $y$ 量の絹および $z$ 量の金などが「たがいにとり代わりうる」ものであり, 「たがいに等しい大きさ」のものであると言いうるのか?  $x$ 量の靴墨,  $y$ 量の絹,  $z$ 量の金などは, 少くともそれぞれと小麦との交換をつうじて, たがいに交換されることができ, したがって, これらのものはたがいに等しい大きさの諸商品である, と言うことはできるであろう。だから, このことを意味するかぎりでのみ, これらのものは「たがいにとり代わりうる, またはたがいに等しい大きさの諸交換価値である」と言うことはできるであろう。

しかし, 「 $x$ 量の靴墨,  $y$ 量の絹,  $z$ 量の金などは, たがいにとり代わりうる, またはたがいに等しい大きさの諸交換価値である」ということが, どうして, 「同じ商品の有効な諸交換価値は, ある同じものを表現している, ということになる」のであろうか? これらのものは, それぞれと小麦との交換をつうじて, たがいに交換されることができ, したがってたがいに等しい大きさの諸商品であると言うことはできようが, なぜ, これらのものは「ある同じものを表現している」と言うことができるのであろうか? 一体, 「ある同じもの」とは何か? 1クォーターの小麦と交換される諸商品が何を表現しているのであろうか?

もし、「同じ商品の有効な諸交換価値」すなわちこの「同じ商品」と交換される他のさまざまな諸商品が「ある同じものを表現している」という見解が正しいとしたら、他のさまざまな諸商品が表現しているものは、この「同じ商品」の一つの性質であろう。しかし、なぜ、同じ商品たとえば1クォーターの小麦と交換される他の商品が、小麦自身の性質を表現していると言えるのであろうか？ 1クォーターの小麦と交換される諸商品が「1クォーターの小麦の諸交換価値」であるのは、マルクス自身がこれらの商品をそのように呼んだからにすぎない。だから、1クォーターの小麦と交換される諸商品が「同じ商品の有効な諸交換価値」であるということ自体は、これらの商品が小麦自身の性質を表現しているということを意味しないのである。

このように、「同じ商品の有効な諸交換価値は、ある同じものを表現している」という命題が成りたちうる根拠は少しも明らかではない。ところが、マルクスは、このあいまいな表現を媒介として、「交換価値は、一般に、それとは区別しうるある内実の表現方法、『現象形態』でありうるにすぎない」と結論したのである。この結論の誤りはおのずと明らかであろう。

1クォーターの小麦が $x$ 量の靴墨と交換されるということは、1クォーターの小麦の商品としての大きさが $x$ 量の靴墨の商品としての大きさに等しいということの意味するから、 $x$ 量の靴墨と交換されるものというこの小麦の性質は、この小麦の商品としての大きさを、すなわちその価値を表現することはたしかである。しかし、 $x$ 量の靴墨と交換されるものは、 $x$ 量の靴墨と同じものではなく、小麦のこの性質は、 $x$ 量の靴墨と同じものではない。ある大きさの商品という1クォーターの小麦の性質、すなわちその価値を表現するものは、 $x$ 量の靴墨ではなく、 $x$ 量の靴墨と交換されるものというこの小麦自体の性質である。つまり、1クォーターの小麦と交換される一定量の他の有用物は、小麦の商品性格の「表現方法」でも、

その「現象形態」でもないし、まして、この小麦の商品としての大きさは区別される大きさの「ある内実」の「現象形態」ではありえないであろう。

また、1クォーターの小麦がaツェントナーの鉄と交換されるということ、すなわち、両者が商品としては相等しい大きさであるということは、商品としての大きさは区別された「同じ大きさのある共通物」が両者のなかに「存在する」ということを意味しないであろう<sup>2)</sup>。ところが、マルクスは、小麦と鉄との交換関係を表わす「1クォーターの小麦＝aツェントナーの鉄」という方程式は、「同じ大きさのある共通物が二つの異なる物のなかに、すなわち1クォーターの小麦のなかにも、同様にaツェントナーの鉄のなかにも存在するということ」(同上、S. 41. (1) 77頁)を意味すると言っている。しかも、彼は、この見解から、「両者のいずれも、それが交換価値であるかぎり、この第三者に還元されるはずである」(同上頁)という結論を導きだしたのである。

さて、ここで注意すべきことは、マルクスが「交換価値」という言葉に与えている意味の不確定性である。はじめに、彼は、1クォーターの小麦と交換される一定量の他の有用物を「1クォーターの小麦の交換価値」と呼んだ。ところが、後になると、彼は、たがいに交換される1クォーターの小麦とaツェントナーの鉄との各々について、「両者のいずれも、それが交換価値であるかぎり、この第三者に還元される」と言い、各商品自身が「交換価値」という性質をもっているかのように述べている。この見地は、彼がすぐ後で述べている見解においては、いっそうはっきりしてくる。すなわち、「諸使用価値としては、諸商品は何よりもまず異なる質であるが、諸交換価値としては、諸商品はただ異なる量でしかありえない」(同上、S.

2) この点については、すでに長野敏一教授が、「二つの商品が交換されるためには、何故、両者に内在的な第三者がなければならないか」(長野敏一「マルクス『資本論』の吟味(二)」『熊本商大論集』第12号、昭和35年12月、15頁)と疑問を述べておられる。

42. (c) 18頁) という見解においては、各商品自体が「使用価値」という性質と「交換価値」という性質とをもちっていると考えられているといえよう。だから、彼は、「最初に、商品はある二面的なものとして、使用価値および交換価値として、われわれに現われた」(同上, S. 45. (c) 85頁) と言い、また、「この章のはじめに、普通の言い方で、商品は使用価値および交換価値である、と言った」(同上, S. 65. (c) 121頁) と言っているのである。

しかし、ある商品の「交換価値」というものが、この商品自体の一つの性質であるか、またはその表現であるならば、ある商品の「交換価値」は、決して他の商品を意味しえないであろう。実際に、マルクスが「交換価値」の一種と理解している各商品の「価格」は、一定額の貨幣と交換されるものという各商品自身の性質であり、この性質が、同じ性質をもっている他のものとの関係において、その商品性格を、すなわちその価値を表現しているのであるが、この「価格」は現実の貨幣と同じものではない。言いかえれば、小麦と交換される一定額の貨幣自体は、小麦の価格ではない。マルクス自身も、同じ『資本論』第1巻の第3章では、「商品の価格または貨幣形態は、その価値形態一般と同様に、商品の手でつかめる現実的な物体形態とは区別された、したがってたんに観念的なまたは表象化された形態である。……商品価値の金における表現は観念的なものであるから、この作業のためにも、たんに表象化されたまたは観念的な金が用いられる」(同上, SS. 100—101. (c) 185—186頁) と言っている。この彼自身の見解からみれば、1クォーターの小麦と交換される「 $x$ 量の金」が「1クォーターの小麦の交換価値」であるという彼の見解は、「観念的な金」が「1クォーターの小麦の交換価値」であるという見解に修正しなければならないであろう。これは、事実上、1クォーターの小麦の「価格」が、1クォーターの小麦と交換される一定額の貨幣自体ではなく、一定額の貨幣と交換される小麦の性質を意味しているという現実にも迫られての修

正とみることができよう。

ただし、彼が、1クォーターの小麦の「交換価値」は、1クォーターの小麦と交換される一定量の他の商品であるという見解を正面から否定せずに、小麦の「価格」は「観念的な金」であるという表現によって事実上修正しただけであったことは、「商品の価格」が「現実的な」形態ではなく「たんに観念的なまたは表象化された形態」であるという見解を彼にもたらしした。だが、「現実的な」と「観念的な」とを対立させる見地の妥当性は別としても、各商品の「価格」すなわち一定額の貨幣と交換されるものという各商品の性質は、商品性格自体と同様に、現実の性質であり、実在しているものであろう<sup>3)</sup>。

このように、ある商品の「交換価値」が、一定量の他の商品と交換されるものというこの商品自体の性質であるならば、それは、この商品と交換される一定量の他の商品ではありえないし、逆に、それが、実際に、この商品と交換される一定量の他の商品であるならば、それは、一定量の他の商品と交換されるものというこの商品自体の性質でも、その表現でもありえない。一定量の他の商品と交換されるものは、一定量の他の商品とは違うからであり、この商品は、他の商品とは違うからである。ところが、マルクスは、各商品の「交換価値」を、この商品自体の一つの性質としてとりあつかうと同時に、この商品と交換される一定量の他の商品としてとりあつかうことによって、各商品と交換される他の商品は、この商品自体のある性質の「現象形態」とであると結論したのである。

3) 「手でつかみうる現実的な物体形態」だけが「現実的な」形態であるというマルクスの理解は、彼が「生産物」および「商品」という諸概念の包括範囲を限定するための基礎となっており、これに基づいて、「生産的労働」と「不生産的労働」との区別についての彼の理論が形成された。このような理解の批判については、拙稿『『サービス』という労働は人間と区別されるものを生産しないというマルクスの見解について——「生産的労働」「不生産的労働」という概念の難点——』（桃山学院大学『経済学論集』第12巻第1号、1970年6月）を参照していただきたい。

## 【2】 「幾何学上の例」に表わされている推論原則

ある商品と交換される一定量の他の商品がある商品の「交換価値」と呼び、この「交換価値」を「それとは区別しうるある内実」に還元したマルクスの推論過程をみると、そこでは、「交換価値」という言葉が流動的な意味で用いられているだけではなく、彼の推論は、経験的に認識されうるものは「目にみえる形とはまったく異なった表現」に還元されなければならないという見解に基づいているようにみえる。このことは、彼自身によって述べられている「簡単な幾何学上の例」をみると、はっきりしてくる。

マルクスは、たがいに交換される二つの物のいずれも、「それが交換価値であるかぎり」二つの異なるもののなかに存在している「同じ大きさのある共通物」に還元されるはずであるという見解を述べた後すぐに、次のように言っている。

「簡単な幾何学上の例が、このことを明らかにする。あらゆる直線形の面積を規定し比較するために、人はそれらを三角形に分解する。この三角形自体を、人はそのみえる形とはまったく異なった表現に——その底辺と高さとの積の2分の1に——還元する。これと同様に、諸商品の諸交換価値は、ある共通なものに還元されるべきであり、そのより多くまたはより少なくを表わしているのである。」（『資本論』Bd. I, S. 41. 岩 1) 78頁）

しかし、「あらゆる直線形の面積」を「三角形に分解する」ことはできようが、この三角形の面積を、何かの面積以外のものに還元することができるであろうか？三角形の面積が「その底辺と高さとの積の2分の1」に等しいという方程式は、三角形の面積が単位面積の、すなわち一定の正方形の面積の何倍に等しいかということを明らかにするだけであって、三角形の面積を何かの面積以外のものに還元するわけではない。面積が面積以外の大きさに還元されうるはずはないであろう。

もし、マルクスが言うように、三角形の面積は「そのみえる形とはまったく異なった表現に——その底辺と高さとの積の2分の1に」還元される



ことができ、また、「これと同様に、諸商品の諸交換価値は、ある共通なものに還元されるべきであり、そのより多くまたはより少なくを表わしているのである」としたら、逆に、三角形の面積または直線形の面積も、「底辺と高さとの積の2分の1」を表わしており、その「現象形態」であるということになるであろう。他方、「あらゆる直線形の面積」や三角形の面積が、「そのみえる形とはまったく異なった表現」である「底辺と高さとの積の2分の1」の表現でも「現象形態」でもないとしたら、「これと同様に」、**「交換価値」**は「それとは区別しうるある内実の表現方法、『現象形態』ではないということになるであろう。こうして、マルクスの「幾何学上の例」は、「諸商品の諸交換価値」を「交換価値」とは区別された「ある共通なもの」に還元する彼の推論方法の誤りを端的に示しているように思える。

いかなる性質の大きさも相対的な概念であって、それを測る絶対的な基準も、「内在的な」尺度もありえない。長さ、面積、時間などの物理学的大ききにしてもそうである。たとえば、あるものの長さは、他のものの長さの倍数としてのみ認識されうる。あるものの商品としての大きさも、それと全く同様に相対的にのみ測定されうるものであって、それを絶対的に測定しうる「内在的価値尺度」(同上, S. 99. 183頁) というものはありえないのである。また、いかなる性質の大きさも、別の性質の大きさには還元できない。あるものの商品としての大きさが、「労働時間」という物理学的大きさに還元できるはずはないし、この物理学的大きさ自体が、相対的な概念なのである。

### 【3】 「労働生産物」を捨象しないで「使用価値」を捨象する根拠

マルクスは、「諸商品の諸交換価値は、ある共通なものに還元されるべきであり、そのより多くまたはより少なくを表わしているのである」と言った後で、この「共通なもの」を明らかにするためには「諸商品の諸使用

価値」を捨象しなければならないという見解を、次のように述べている。

「…諸商品の交換関係を明白に特徴づけるものは、まさに諸商品の諸使用価値の捨象である。この交換関係の内部では、一つの使用価値は、それが適当な比率で存在しさえすれば、他のどの使用価値ともちょうど同じだけに通用する。……諸使用価値としては、諸商品は何よりもまず異なる質であるが、諸交換価値としては、諸商品はただ異なる量でしかありえないのであり、したがって一原子の使用価値も含んでいないのである。

いま商品体の使用価値を無視するならば、そこに残るものはもはや一つの属性だけ、労働生産物という属性だけである。だが、われわれにとっては、労働生産物も、すでに手の中で変えられている。われわれが労働生産物の使用価値を捨象するならば、われわれは、それを使用価値にする物的な諸成分や諸形態をも捨象することになる。……それは、もはや机または家または糸またはその他の有用な物ではない。……それはまた、もはや指物労働または建築労働または紡績労働またはその他の一定の生産的労働の生産物でもない。労働生産物の有用な性質とともに、労働生産物に表わされている労働の有用な性質が消えさり、したがって、これらの労働の異なる 具体的諸形態も また消えさり、これらの労働はもはやたがいに 区別されず、ことごとく同じ人間的労働に、抽象的人間的労働に還元されている。

さて、労働生産物の残留物を考察しよう。同じ幽霊的対象性以外には、無差別な人間的労働の、すなわちその支出の形態にかかわりのない人間的労働力の支出の単なる膠質物以外には、労働生産物の何ものも残ってはいない。」（『資本論』 Bd. I, S.42. 岩 (1) 79頁）

このように、マルクスは、「この交換関係の内部では、一つの使用価値は、それが適当な比率で存在しさえすれば、他のどの使用価値ともちょうど同じだけに通用する」ということ、そして、「諸使用価値としては、諸商品は何よりもまず異なる質であるが、諸交換価値としては、諸商品はただ異なる量でしかありえない」ということを、「諸商品の諸使用価値の捨象」の根拠としており、これによってそこに残るものは「労働生産物という属性だけ」であると言っている。

しかし、「諸使用価値」が質的に異なっていると同じ程度に、「労働生産物」も質的に異なっているであろう。だから、「諸使用価値としては、諸商品は何よりもまず異なる質である」としたら、「労働生産物」としても、

諸商品は「何よりもまず異なる質」であろう。マルクス自身が、「もしこれらのものが質的に異なる使用価値ではなく、したがって質的に異なる有用的労働の生産物ではないならば、これらのものは一般に商品として相対をすることはありえないであろう」（同上、S. 46. (1) 86頁）と言っている。したがって、「諸使用価値としては、諸商品は何よりもまず異なる質である」ということが「諸使用価値」の捨象の根拠であるならば、同様に、「労働生産物」としては、諸商品は「何よりもまず異なる質」であるということが「労働生産物」の捨象の根拠であるということになる。すなわち、マルクス自身が「諸商品の諸使用価値」の捨象の根拠として述べている命題によれば、「諸商品の諸使用価値」の捨象によってそこに残るものは、決して「労働生産物という属性」ではありえないであろう。

さらに、「この交換関係の内部では、一つの使用価値は、それが適当な比率で存在しさえすれば、他のどの使用価値ともちょうど同じだけに通用する」ということも、「労働生産物」を捨象しないで「使用価値」だけを捨象する根拠とはなりえない。なぜならば、「労働生産物」についても同じことが言えるからである。すなわち、「この交換関係の内部では」、一つの「労働生産物」は、「それが適当な比率で存在しさえすれば」、他のどの「労働生産物」とも「ちょうど同じだけに通用する」であろう。

このように、「諸使用価値としては、諸商品は何よりもまず異なる質である」ということも、「この交換関係の内部では、一つの使用価値は、それが適当な比率で存在しさえすれば、他のどの使用価値ともちょうど同じだけに通用する」ということも、「使用価値」だけを無視して「労働生産物という属性」を残す根拠とはなりえないし、また、「労働生産物に表わされている労働」を残す根拠ともなりえない。もし、「諸使用価値としては、諸商品は何よりもまず異なる質である」ということが「使用価値」一般を捨象する根拠となるのであれば、「労働生産物」としては諸商品は「何よりもまず異なる質」であるということが、「労働生産物」一般を捨象する

根拠となるであろう。逆に、「労働生産物」の質的な違いだけが捨象され、また「労働生産物に表わされている労働」の質的な違いだけが捨象されて、「無差別な人間的労働」または「労働一般」(同上, S. 208. (2) 104頁)が残されるべきであるならば、それと同様に、「使用価値」の質的な違いだけが捨象されて、「使用価値」一般という性格が残されるべきであろう<sup>4)</sup>。

ただし、「無差別な人間的労働の単なる膠質物」という性質にせよ、「労働生産物」一般という性質にせよ、また「使用価値」一般という性質にせよ、いずれも「価値」という性質と同じものではないである。「価値」は、「質的に異なる有用的労働」の膠質物という具体的諸形態をとるわけではなく、「質的に異なる有用的労働の生産物」という具体的諸形態をとるわけでもなく、また「質的に異なる使用価値」という具体的諸形態をとるわけでもないであろう。「使用価値」が「異なる質」として存在するのと同様に、「生産物」も「労働」も「異なる質」として存在するが、「価値」は「異なる質」としては存在しない。マルクス自身が、「諸交換価値としては、諸商品はただ異なる量でしかありえない」と言っているのである。

- 4) この点については、ベーム・バヴェルクが適切な批判をしている。彼は、この第3節のはじめに引用したマルクスの見解について、次のように言う。「交換関係にとっては、たんに使用価値だけではなく、ある種類の労働および労働生産物も、『それが適当な比率で存在しさえすれば、他のどの労働および労働生産物ともちょうど同じだけに通用する』ということを、いいかえれば、マルクスがたったい使用価値にたいして失格判定を言いわたす根拠としたものと正確に同じ事実が、労働についてもまた存在しているということを、これ以上に明瞭かつ明確に述べることができるであろうか?……使用価値が机として、家として、または糸として質的に異なるのと同様に、労働もまた指物師の労働として、建築労働として、または紡績労働として質的に異なっている。……なぜ、この同一の事実が、ある競争者にとっては失格という結果をもたらし、他の競争者にとっては褒美とともに栄冠を授けるという結果をもたらすのか、まったく不可解である。」(Eugen von Böhm-Bawerk, *Kapital und Kapitalzins*, I, 4 Aufl., Iena 1921, SS. 385—386. 竹原八郎訳『マルクス学説体系の終焉』日本評論社, 124頁)

なお、ベーム・バヴェルクのマルクス批判の弱点は、彼の「労働」概念がマルクスのものと同じであるということから生じていると私は考えているが、この点については別の機会に述べたい。

さらに、「この交換関係の内部では、一つの使用価値は、それが適当な比率で存在しさえすれば、他のどの使用価値ともちょうど同じだけに通用する」のと同様に、「この交換関係の内部では」、一つの「労働生産物」は、「それが適当な比率で存在しさえすれば」、他のどの「労働生産物」とも「ちょうど同じだけに通用する」のであるから、「この交換関係の内部で」のみ、「質的に異なる使用価値」が「異なる量」として通用するのと同様に、「この交換関係の内部で」のみ、「質的に異なる労働生産物」は「異なる量」として通用するであろう。このことは、交換関係が諸商品の「異なる量」を規定するということ、したがって、交換関係が諸商品の同じ質である「価値」を規定するということを意味する。こうして、「労働生産物」の「交換関係の内部で」の大きさ、すなわちその「価値」は、その「交換関係」の外部での大きさと同じではなく、それに還元されもしないであろう。

**【4】 「商品体の使用価値を無視する」と、「交換価値」は「労働生産物」に転化し、「労働生産物」はその「価値」に転化するか？**

もし、マルクスが言うように、「商品体の使用価値を無視するならば、そこに残るものはもはや一つの属性だけ、労働生産物という属性だけである」としたら、「商品体」は「使用価値」という属性と「労働生産物という属性」とをもちっていることになるであろう。そして、このばあい、「商品体の使用価値を無視する」ことは「商品の使用価値」を捨象することと同じであり、したがって、「商品体」は「商品」と同義であるから、「商品」が「使用価値」という属性と「労働生産物という属性」とをもちっていることになるであろう。しかし、この結果は、マルクス自身が「この章のはじめに」前提した「商品は使用価値および交換価値である」という命題と対立する。

しかも、マルクスは、「商品体の使用価値を無視するならば、そこに残

るものは……労働生産物という属性だけである」と言った後で、さらに、この残留物である「労働生産物」について、「労働生産物の使用価値を捨象するならば」そこに残るものは「無差別な人間的労働の……単なる膠質物」であるという見解を述べ、これが「商品価値」(『資本論』 Bd. I, S. 42. 岩 (1) 80頁) だと言うのである。そうであるとしたら、「商品体」は「使用価値」という属性と「労働生産物という属性」とをもっているが、さらに、この「労働生産物という属性」自体も、「使用価値」という属性と「無差別な人間的労働の単なる膠質物」または「商品価値」という属性とをもっていることになるのであろうか？

しかし、マルクスは、これまで、「商品の使用価値」を捨象する理由については述べてきたが、「労働生産物の使用価値」を捨象する理由については述べていない。彼は、「労働生産物」という概念自体を、ここではじめて使ったのである。さらに、彼が、「商品体の使用価値を無視するならば、そこに残るものは……労働生産物という属性だけである」と言った後ですぐに、「だが、われわれにとっては、労働生産物も、すでに手の中で変えられている」と言っていることは、「商品体の使用価値を無視する」ことによって得られた「労働生産物」が、「商品体の使用価値を無視する」と自体によって「商品価値」に「変えられている」と考えていることを意味するであろう。したがって、ここでは、「労働生産物の使用価値を捨象する」ことは、「商品体の使用価値を無視する」とことと同義であるといえるであろう。

実際に、マルクスは、後で、「諸商品の交換関係自体において、商品の交換価値は、その使用価値からはまったく独立なあるものとしてわれわれに現われた。いま実際に労働生産物の使用価値を捨象するならば、ちょうどいま規定されたような労働生産物の価値が得られる。したがって、商品の交換関係または交換価値に現われる共通物は商品の価値である」(同上, SS. 42—43. (1) 80頁) と言っている。ここでは、明らかに、「商品の使用価値」

は「労働生産物の使用価値」と同義であり、「商品の価値」は「労働生産物の価値」と同義であり、したがって、「商品」は「労働生産物」と同義である。

こうして、「商品体の使用価値を無視するならば、そこに残るものは……労働生産物という属性だけである」という奇妙な見解を媒介として、「商品体の使用価値を無視する」こと、すなわち「商品の使用価値」を捨象することが、いつのまにか、「労働生産物の使用価値を捨象する」ことにすりかえられたのであり、したがって、「商品」という概念自体が「労働生産物」という概念にすりかえられたのであり、また、「商品は使用価値および交換価値である」という命題も、事実上、「労働生産物」は「使用価値および交換価値である」という命題にすりかえられたのである。そして、このことは、「労働生産物の使用価値を捨象する」ことの結果を、「商品体の使用価値を無視する」ことの結果と同一視し、したがって、「労働生産物の使用価値を捨象する」ことによるその残留物を「商品価値」と同一視するための前提であった。だから、「商品体の使用価値を無視するならば、そこに残るものは……労働生産物という属性だけである」という命題は、事実上、「商品」を「労働生産物」と同義のものとしている彼の前提を、「商品体の使用価値を無視する」ことの論理的帰結であるかのように述べているといってもよいであろう。

さて、「商品」は「労働生産物」と同義であり、「商品体の使用価値を無視する」ことは「労働生産物の使用価値を捨象する」と同じであるとしたら、「商品体の使用価値を無視するならば、そこに残るものは……労働生産物という属性だけである」という命題は、『労働生産物の使用価値』を無視するならば、そこに残るものは労働生産物という属性だけである」という表現に言い換えることができる。したがって、「労働生産物」は、「労働生産物という属性」と「使用価値」という属性とをもっていることになる。こうしてみると、この命題の奇妙さが鮮明になるであろう。この命

題が、マルクス自身の二つの重要な命題と矛盾することも明らかである。

第一に、マルクス自身が「この章のはじめに」前提したように「商品は使用価値および交換価値である」としたら、「商品の使用価値」を無視することによってそこに残るものは「商品の交換価値」であろう。このばあい、「商品」は「労働生産物」と同義であり、したがって、「商品は使用価値および交換価値である」という命題は、「労働生産物」は「使用価値および交換価値」であるという表現に言い換えられうるとしても、「労働生産物の使用価値を捨象する」ことによって残るものは、やはり「交換価値」という属性であって、「労働生産物という属性」ではないであろう。ところが、マルクスは、「商品体の使用価値を無視するならば、そこに残るものは……労働生産物という属性だけである」と言い、いつのまにか、「交換価値」という概念の代りに「労働生産物」という概念をおきかえているのである<sup>5)</sup>。

第二に、マルクスは、「商品体の使用価値を無視するならば」言い換えれば「労働生産物の使用価値を捨象するならば」「労働生産物という属性」が得られると言った後で、「労働生産物の使用価値を捨象するならば」「無差別な人間的労働の単なる膠質物」が得られると言い、また、「労働生産物の使用価値を捨象するならば、ちょうどいま規定されたような労働生産物の価値が得られる」と言っている。すなわち、マルクスは、事実上、「労働生産物の使用価値を捨象するならば」「労働生産物という属性」が得られると言った後で、「労働生産物の使用価値を捨象するならば……労働生産物の価値が得られる」と言っているのである。

「労働生産物」と「商品」とが同義であったとしても、「労働生産物」と「労働生産物の価値」とは同義ではないであろう。現にマルクス自身が、「労働生産物の使用価値を捨象すれば……労働生産物の価値が得られる」

5) 長野敏一教授も、すでにこの点について、『商品』を最初『使用価値』と『交換価値』に分析しながら、ここではあらためて、『使用価値』と『労働生産物』に分析しかえているかに見える」（前掲論文、18頁）と指摘しておられる。



と言っているのである。ところが、彼は、「われわれにとっては、労働生産物も、すでに手の中で変えられている」と言って、「労働生産物」という概念自体が「手の中で」自動的に「無差別な人間的労働の単なる膠質物」または「労働生産物の価値」という別の概念に変化しているかのように述べているのである。

このばあい、もし、「商品体の使用価値を無視する」ことによって得られる「労働生産物という属性」は、「労働生産物の価値」という概念の仮の表現であると考えれば、「商品体の使用価値を無視するならば、そこに残るものは……労働生産物という属性だけである」という命題も、「商品体の使用価値を無視するならば、そこに残るものは『労働生産物の価値』だけである」という命題の仮の表現だと考えなければならないであろう。そうすると、マルクスは、はじめから、「商品体」が「使用価値」と「労働生産物の価値」との統一物であるということを前提していたことになり、この前提を、「商品体の使用価値を無視する」ことの論理的帰結であるかのように述べているだけだということになるであろう。

以上で明らかのように、マルクスにおいては、「商品体の使用価値を無視する」ことは、「商品の交換価値」を「労働生産物」に還元し、さらに、この「労働生産物」を「無差別な人間的労働の単なる膠質物」に変化させるのであり、しかも、「無差別な人間的労働の単なる膠質物」は「労働生産物の価値」であることがおのずから明らかになるのである。「商品体の使用価値を無視する」という表現は、マルクスの諸概念にたいして、一つの呪文のような効果を与えていると言えよう<sup>6)</sup>。

#### 【5】 「使用価値」は「商品体自身」を意味すると同時にその「有用な性質」を意味するか？

マルクスが、「商品体の使用価値を無視する」という表現を、いつのま

6) 長野敏一教授が、別の点について、マルクスの「魔術」(前掲論文, 10頁)を指摘しておられることは興味深い。

にか「労働生産物の使用価値を捨象する」という表現に変え、また、「商品体の使用価値を無視する」ならば「労働生産物」がそこに残り、この「労働生産物」自体は「無差別な人間的労働の単なる膠質物」に変えられていると言うとき、彼は、「使用価値」という言葉の意味をもいつのまにか変えていたのである。

マルクス自身がこのすぐ前に言っているように、「ある物の有用性はこの物を使用価値にする。……鉄、小麦、ダイヤモンドなどのような商品体自身が使用価値または財である」（『資本論』Bd. I, S. 40. 岩 (1) 75頁）としたら、「使用価値」を無視することは「商品体自身」を無視することであろう。これに反して、「商品体の使用価値を無視する」ならば「労働生産物という属性」が「商品体」に残るという見解においては、明らかに、「商品体」は「使用価値」という一属性をもっているとはいえ、「商品体自身」は「使用価値」ではない。

もともと、「商品体自身が使用価値または財である」ならば、「商品体の使用価値」という概念は成りたちえないはずであろう。それにもかかわらず、マルクスは、「商品体の使用価値」という言葉を使うことによって「使用価値」の意味をあいまいにし、事実上、それを「商品体自身」ではなく「商品体」の一つの性質としてとりあつかっているのであり、「商品体自身が使用価値である」という彼自身の事実上の定義をとり消すことなしに、それとは矛盾する意味を「使用価値」に与えているのである。

また、「商品体自身が使用価値である」としたら、「商品体」が「労働生産物」であるのと同様に「使用価値」は「労働生産物」であり、それ故、彼自身も言っているように、「質的に異なる使用価値」は「質的に異なる有用的労働の生産物」であろう。だからこそ、彼は、「ある使用価値または財が価値をもつ」（同上, S. 43. (1) 80頁）理由について述べ、「ある使用価値の製造に社会的に必要な労働時間」が「その使用価値の価値量」（同上, S. 44. (1) 81頁）を規定するという見解を述べることになる。

このように、「商品体自身が使用価値である」としたら、「使用価値」は「労働生産物」であるから、「商品体の使用価値」という概念が成りたちえないのと同様に、「労働生産物の使用価値」という概念も成りたちえないであろう。「労働生産物の有用な性質」を「労働生産物の使用価値」と言い表わすことはできないであろう。マルクス自身が、「ある物の有用性はこの物を使用価値にする」となっており、「ある物の有用性」自体を「使用価値」と呼んではいけないのである。

ところが、マルクスは、「労働生産物の使用価値」という言葉を使うことによって「使用価値」の意味を事実上変え、それを「労働生産物」としてではなく「労働生産物の有用な性質」としてとりあつかっている。すなわち、彼によれば、「労働生産物の使用価値を捨象する」ならば、「労働生産物の有用な性質とともに、労働生産物に表わされている労働の有用な性質が消えさり、したがって、これらの労働の異なる具体的諸形態もまた消えさり、これらの労働は……ことごとく同じ人間的労働に、抽象的人間的労働に還元されている。」その結果、「無差別な人間的労働の……単なる膠質物以外には、労働生産物の何ものも残ってはいない」のであり、これが「商品価値」である。

つまり、マルクスは、「労働生産物の使用価値」を捨象することは、「労働生産物の有用な性質」および「労働生産物に表わされている労働の有用な性質」を捨象することであり、「労働の有用な性質」を捨象することは「これらの労働の異なる具体的諸形態」を捨象して「同じ人間的労働」を抽出することであると考えている。

しかし、すでに述べたように、「商品体自身が使用価値である」ならば、「商品体」が「労働生産物」であるのと同様に、「使用価値」は「労働生産物」であるから、「使用価値」を捨象することは、「労働生産物」自体を捨象することではありえても、「労働生産物の有用な性質」を捨象することではありえず、まして、「これらの労働の異なる具体的諸形態」を捨象

することではありえないであろう。

マルクス自身が言うように、「質的に異なる使用価値」は「質的に異なる有用的労働の生産物」であるならば、「これらの労働の異なる具体的諸形態」を捨象することは、「使用価値」自体を捨象することに対応するものではなく、「使用価値」の異なる具体的諸形態を捨象することに対応するものであろう。実際に、マルクスは、「上着および亜麻布という諸価値においては、それらの使用価値の違いが捨象されているように、これらの価値に表わされている諸労働においては、諸労働の有用な諸形態の違いが、裁縫と織布との違いが捨象されている」(同上, S. 49. c) 91頁) とも言っているのである。このばあいには、彼自身が、「諸労働の有用な諸形態の違いが……捨象されている」ことは、「それらの使用価値の違いが捨象されている」ことに対応すると考えている。ただし、それと同時に、彼は、「諸労働の有用な諸形態の違い」を捨象することは「無差別な人間的労働」すなわち「労働一般」を抽出することであると考えたが、「使用価値の違い」を捨象することは、無差別な「使用価値」すなわち「使用価値一般」を抽出することではなく、反対にそれを捨象することであると考えた。この点は後で問題にするが、このような論理的方法の変化にもとづいて、「労働一般」がもたらすものは「使用価値一般とは異なるもの、すなわち「価値」であるという見解が成りたっているのである。

さて、すでに明らかのように、マルクスにおいては、「商品体の使用価値」を捨象することは、一面では、「使用価値の違い」を捨象することであり、それに応じて、「諸労働の有用な諸形態の違い」を捨象して「無差別な人間的労働」を抽出することであるが、それと同時に、「使用価値」自体を捨象することであり、したがって「使用価値」とはまったく異なるもの、すなわち「商品価値」を抽出することである。このように、「使用価値の捨象」が二つの異なる意味をもつことに基づいて、「商品体の使用価値」を捨象するならば「無差別な人間的労働の単なる膠質物」がそこに

残り、これが「商品価値」であるという見解が成立したのである。

このように、「使用価値の捨象」が、「使用価値」自体の捨象を意味するとともに、「使用価値の違い」の捨象をも意味し、したがって、「使用価値」という言葉が、事実上、それ自身とは異なる意味で、すなわち「使用価値の違い」という意味でも用いられているが、このことは、マルクスが「使用価値」という言葉に与えた事実上の定義に反する「商品体の使用価値」という概念が用いられることに媒介されていた。すなわち、マルクスは、「商品体自身が使用価値である」という彼自身の見解によれば成りたちえないはずの「商品体の使用価値」という概念を使うことによって、「使用価値」を、「商品体自身」ではなく、その一つの属性を表わす言葉としてとりあつかった。だから、「商品体の使用価値」を捨象することは、「労働生産物の使用価値」を捨象することになりえたのであり、つぎに、それは、「労働生産物の有用な性質」を捨象することという隠されていた意味をあらわし、さらに、「労働生産物に表わされている労働の有用な性質」を捨象することに転じ、最後に、「諸労働の有用な諸形態の違い」または「これらの労働の異なる具体的諸形態」を捨象して「同じ人間的労働、抽象的人間的労働」を抽出することになった。ところが、「諸労働の有用な諸形態の違い」を捨象することは、彼自身も認めているように、「使用価値の違い」を捨象することに対応するものである。このようにして、「商品体の使用価値」を捨象することは、「使用価値の違い」を捨象することになったのである。しかし、それと同時に、「商品体の使用価値」を捨象することは、やはり「使用価値」自体を捨象して「価値」を得ることでもあった。

このように、マルクスが、「商品体の使用価値を無視する」ならば「無差別な人間的労働の単なる膠質物」がそこに残るから、これが「商品価値」であるという命題を導きだすとき、彼は、「商品体自身が使用価値である」という彼自身の見解によれば成りたちえないはずの「商品体の使用価値」

「労働生産物の使用価値」という諸概念を使うことによって、「使用価値」という言葉に、「商品体自身」という意味と、その「有用な性質」または「有用な諸形態の違い」という意味とを与え、異なる意味を恣意的に使っているのである。

「商品体の使用価値」「労働生産物の使用価値」というあいまいな諸概念は、この『資本論』第1巻の第4章および第5章では、「労働力の使用価値」「油の使用価値」などのような特殊化された表現で現われてくる。そのばあいには、マルクスは、「労働力の使用価値」という言葉を、「労働力の使用、労働」(同上, S. 193. (1) 78頁) という意味で使っている。すなわち、彼は、そのばあい、「使用価値」という言葉を、「商品体自身」という意味で使ったり、商品体の「使用」という意味で使ったりしており、そのことによって、賃金労働者によって売られる商品は労働ではなく労働力であるという命題から、「彼によって売られる使用価値」(同上, S. 193. (1) 78頁) は「労働力の使用、労働」であるというその反対の命題を事実上ひきだしている<sup>7)</sup>。

マルクスの経済学体系、とくに「労働力の生産」についての独特な見解にもとづく彼の剰余価値説は、彼が、たとえば「生産」という言葉に、その本来の意味およびそれとは「本質的に違う」意味を与えることによって成りたっている<sup>8)</sup>。ある命題を証明するためにあいまいな諸概念を使い、言葉の意味を恣意的に変えることは、マルクスの推論方法の特徴といえるであろう。

7) 拙稿「労働力の販売は労働の譲渡であるというマルクスの見解について——彼の剰余価値説に用いられている『弁証法』——」(桃山学院大学『経済学論集』第13巻第3号, 1971年12月)の第4節「『使用価値』のあいまいな意味」(とくに, 44～45頁)を参照していただきたい。

8) 拙稿「『労働力の生産』についてのマルクスの見解の難点——生産概念および消費概念の再検討のために——」高木幸二郎教授編著『再生産と産業循環』所載。ミネルヴァ書房)の第3節「マルクスにおける『生産』の二つの意味」を参照していただきたい。

【6】 「労働の諸形態の違い」の捨象は「労働一般」の抽出であるが、  
「使用価値の違い」の捨象は「使用価値」一般の捨象か？

すでにみたように、マルクスにおいては、「商品の使用価値の捨象」は、文字通りに「使用価値」自体の捨象を意味するとともに、「使用価値の違い」の捨象をも意味する。そしてこのことは、逆に、「使用価値の違い」の捨象が「使用価値」自体の捨象を意味することと不可分であった。すなわち、彼自身が、「上着および亜麻布という諸価値においては、それらの使用価値の違いが捨象されているように、これらの価値に表わされている労働においては、諸労働の有用な諸形態の違いが、裁縫と織布との違いが捨象されている」と言っていることをみても明らかなように、彼は、一方では、「諸労働の有用な諸形態の違い」を捨象することは、「無差別な人間的労働」すなわち「労働一般」を抽出することであると考えたにもかかわらず、他方では、「使用価値の違い」を捨象することは「使用価値」一般を抽出することではなく、反対に、それを捨象することであると考えたのである。このような論理的原則の不確定性にもとづいて、「諸労働の有用な諸形態の違い」がもたらすものは「使用価値の違い」であるが、「労働一般」がもたらすものは「使用価値」一般とは異なるもの、すなわち「価値」であるという見解が成立したのである。

マルクスが、「もしそれらのものが質的に異なる使用価値ではなく、したがって質的に異なる有用的労働の生産物ではないならば、それらのものは一般に商品として相対することはありえないであろう」という見解にもとづいて、「労働生産物」を捨象しないで「使用価値」を捨象し、それどころか、「使用価値」を捨象することは「労働生産物」を抽出することであり、さらに「労働一般」を抽出することであると考えたのも、「質的に異なる有用的労働」の質的な違いを捨象することは「労働一般」を抽出することであるが、「質的に異なる使用価値」の質的な違いを捨象すること

は「使用価値」一般を抽出することではなく、逆に、それを捨象することであると考えたためであろう。

しかし、このような見解が誤っていることは明らかである。「諸労働の有用な諸形態の違い」を捨象することは「労働一般」を捨象することではないのと同様に、「使用価値の違い」を捨象することも「使用価値」一般を捨象することではないであろう。「諸労働の有用な諸形態の違い」を捨象することによって得られるものは「労働一般」という概念であるのと同様に、「使用価値の違い」を捨象することによって得られるものは「使用価値」一般という概念であろう。「使用価値」が「質的に異なる使用価値」という形でしか実在しないということは、「使用価値」一般だけを捨象して「労働一般」を捨象しない根拠となりえないことは、第3節で述べたとおりである。「労働」もまた、「質的に異なる有用的労働」という形でしか実在しないからである。

このように、「これらの労働の異なる具体的諸形態」を捨象することは、「使用価値」の「異なる具体的諸形態」を捨象することに対応するものであり、しかも、「使用価値」の「異なる具体的諸形態」を捨象することは、「使用価値」一般を捨象することではなく、それを抽出することである。したがって、「労働一般」を抽出することは、「使用価値」一般を抽出することに対応するものであり、「労働一般」を捨象することが、「使用価値」一般を捨象することに対応するものであろう。だから、「労働生産物の使用価値を捨象する」ことが、文字どおりに「使用価値」自体を捨象することであり、したがって、それによって得られるものが「価値」であるならば、「労働生産物の使用価値を捨象する」ことは、「これらの労働の異なる具体的諸形態」を捨象することではなく、「労働」自体を捨象することに対応するものであろう。

また、「労働一般」を抽出することは「使用価値」一般を抽出することに対応するものであるとしたら、「労働一般」によって生産されるものは、



「使用価値」一般であって、「価値」ではないであろう。言い換えれば、「使用価値」一般は「労働一般」によって生産されるのであって、「質的に異なる有用的労働」によって生産されるのではないであろう。マルクス自身が、「質的に異なる使用価値」は「質的に異なる有用的労働の生産物」であると言っているように、「質的に異なる有用的労働」が生産するものは、「使用価値」一般ではなく、「質的に異なる使用価値」であろう。

「労働一般」によって生産されるものは「使用価値」一般であるということが明らかになれば、「労働一般」が「無差別な人間労働の単なる膠質物」を形成するという見解の無意味さもまた明らかになるであろう。マルクス自身も言うように、「上着、亜麻布などの使用価値、簡単にいえば商品体は、自然素材と労働との二つの要素の結合」(同上, S. 47. (1) 88頁)であって、「使用価値」は「労働」だけの「膠質物」ではないから、「労働生産物」一般も「労働」だけの「膠質物」ではないのである。「無差別な人間的労働」が「無差別な人間的労働の単なる膠質物」を形成するとい命題は、事実上、「無差別な人間的労働」は何ものも形成しないという命題に帰着する。

なお、マルクスが問題にしている「労働」は、生産者の労働であって、生産手段として使われるものの労働でないことは、もちろんである。そのように限定された「労働一般」が、「同じ人間的労働」として理解されるものかどうか、また、「生理学的な意味での人間的労働力の支出」(同上, S. 51. (1) 94頁)として理解しうるかどうかは、別の問題である。ヒトは生産者であるとはかぎらず、生産手段でもありうるし、「生理学的な意味での」同質性は、経済学的な意味での同質性とは異なるからである<sup>9)</sup>。

9) この問題については、拙稿「生産者と生産物の所有者との同一性——マルクスの生産概念の批判——」(桃山学院大学『経済学論集』第12巻第4号, 1971年3月)を参照していただきたい。

## 【7】 同質の「価値」が「質的に異なる使用価値」という具体的諸形態をとるか？

「質的に異なる有用的労働」の質的な違いを捨象することは「労働一般」を抽出することであるが、「質的に異なる使用価値」の質的な違いを捨象することは「使用価値」一般とは異なるもの、すなわち「価値」を抽出することであるというマルクスの見解は、「質的に異なる有用的労働」という具体的諸形態をとっているものは「労働一般」であるが、「質的に異なる使用価値」という具体的諸形態をとっているものは「使用価値」一般ではなく「価値」であるという見解を事実上前提する。

また、「労働生産物の使用価値を捨象する」ことは、「労働生産物に表わされている労働の有用な性質」および「これらの労働の異なる具体的諸形態」を捨象して「同じ人間的労働，抽象的人間的労働」を抽出することであるというマルクスの見解は、「質的に異なる具体的有用的労働」が「使用価値」を生産し、「同じ人間的労働，抽象的人間的労働」が「使用価値」とは異なる「価値」を形成するという見解と表裏の関係にあり、したがって、このような「商品に含まれている労働の二面的性質」（『資本論』Sd. I, S. 46. 岩 (c) 85頁）が商品自体の二面的性質として「表わされる」（同上, S. 45 (c) 85頁）という見解と不可分である。この見地からみても、「商品価値」と「商品の使用価値」との相互関係は、「商品に含まれている労働」の「同じ人間的労働，または抽象的人間的労働という属性」（同上, S. 51. (c) 94頁）とその「具体的有用的労働という属性」（同上頁）との相互関係を表現していることになるであろう。すなわち、「同じ人間的労働，抽象的人間的労働」が「質的に異なる有用的労働」という「具体的諸形態」をとると同様に、同じ「価値」が「質的に異なる使用価値」という具体的諸形態をとることになるであろう。

この見解の難点は、前節で、「質的に異なる使用価値」の質的な違いを

捨象することは「使用価値」一般とは異なるもの、すなわち「価値」を抽出することであるという見解を批判したときにすでに明らかであろうが、ここでは、「異なる使用価値」がもつ「諸価値」が、「異なる使用価値」という諸形態をとるという見解に固有の難点を、『資本論』第1巻第1章の第3節に述べられている「価値形態」についての見解との関連で、指摘しておきたい。

第一に、マルクスが、「上着および亜麻布という諸価値においては、これらの使用価値の違いが捨象されている」と言っており、それらの価値形態の違いが捨象されていると言っていないことから明らかなように、彼は、「同じ人間的労働、抽象的人間的労働」が裁縫や織布のような「質的に異なる有用的労働」という具体的諸形態をとるのに応じて、「上着および亜麻布という諸価値」が上着や亜麻布のような「質的に異なる使用価値」という具体的諸形態をとると考ええているが、この見解によれば、上着の価値は上着という具体的形態をとり、亜麻布の価値は亜麻布という具体的形態をとることになるであろう。しかし、この見解は、「わたくしは、たとえば亜麻布の価値を、亜麻布で表現することはできない。……亜麻布の価値は……他の商品でのみ表現されうる」(同上, SS. 53—54. (1) 99頁) という彼自身の見解と対立する。彼が、ある有用物の価値という性質は、この有用物自体のある性質という形態で表現されるとは考えないで、それが、他の有用物という形態で表現されると考えた点については、最初に問題にしたので、いまは問題外として言えば、彼は、ここでは、「亜麻布の価値」は亜麻布という「使用価値」とは異なる具体的形態をとるということを、事実上述べていると言えよう。

第二に、その点は別としても、異なる有用物がもつ同質の「諸価値」が、質的に異なる諸形態をとっているという見解はおかしいであろう。価値としての同質性は、同じ形態でしか認識できないはずである。この点についても、マルクス自身が、「各商品の価値」は「統一的な、一般的価値形態」

(同上, S. 73. (1) 134頁) においてはじめて「この商品とすべての商品とに共通なものとして表現され」(同上, S. 71. (1) 131頁), 「したがって, この形態がはじめて現実には諸商品をたがいに諸価値として関係させる」(同上頁) と言っている。この見解からは, 統一的な価値表現ではない「単純な価値形態」および「展開された価値形態」は, 「現実には諸商品をたがいに諸価値として関係させる」ことはできず, したがってそれらは現実の価値形態ではありえないという結論が生ずるはずであろう。ただし, 彼は, それと同時に, これらの「価値形態」が, 歴史上のある時期に現実には価値形態としてあらわれたと述べている(同上, S. 71. (1) 130—131頁)。「使用価値の違い」を捨象すれば「価値」が得られるという見解は, このような論理的撞着なしには成り立たなかったと言えるであろう。

彼によれば, この「展開された価値形態」は, 同じ商品の価値に, 質的に異なる使用価値というさまざまな現象形態を与え, また, 異なる商品の価値に, 異なる現象形態を与え, 「ここでは, 諸商品の共通な価値表現はすべて, 直接に排除されている」(同上, S. 71. (1) 130頁)。彼が, 「価値実体」について論じた最初の節で, 「同じ商品の有効な諸交換価値は, ある同じものを表現している」と言い, また, 「諸商品の諸交換価値は, ある共通なものに還元されるべきである」と言ったことも, 事実上, このような「展開された価値形態」や「単純な価値形態」が実在したという見解を表わしているといえよう。このような見解からすれば, 「使用価値の違い」を捨象すれば「価値」が得られるという見解, すなわち, 同質の「価値」が「質的に異なる使用価値」というさまざまな具体的諸形態をもつという見解には, 何の難点もないのであろう。しかし, これらの「価値形態」が, 異なる有用物の諸価値に異なる表現を与えるということは, これらの「価値形態」が, 異なる有用物の諸価値を「同じもの」として表現してはいないことを意味し, したがって現実の価値形態ではありえないことを意味する。そして, マルクス自身が, このような不統一な「価値形態」は, 「現

実に諸商品をたがいに諸価値として関係させる」ことはできないと考えていたこともたしかなのである。

さて、同質の「価値」が「質的に異なる使用価値」という具体的諸形態をとっているという見解が誤りであり、したがって「質的に異なる使用価値」の質的な違いを捨象することによって得られるものは「使用価値」一般とは異なるもの、すなわち「価値」であるという見解も誤りであるならば、「価値」と「質的に異なる使用価値」との関係は、「同じ人間的労働、抽象的人間的労働」と「質的に異なる具体的有用的労働」との関係を表現しているという見解も誤りであろう。「労働一般」と「質的に異なる具体的有用的労働」との関係を表現するものは、「使用価値」一般と「質的に異なる使用価値」との関係であろう。この点からみても、「使用価値を捨象する」ことは「労働生産物に表わされている労働の有用な性質」および「これらの労働の異なる具体的諸形態」を捨象して「同じ人間的労働、抽象的人間的労働」を得ることであるというマルクスの見解は誤っているであろう。

#### 【8】 異なる生産者の労働の質的な違いは「有用な諸形態の違い」に帰着するか？

異なる生産者の労働の「同じ人間的労働」という性質が、彼らの生産物の「価値」という性質に表わされるというマルクスの見解は、異なる生産者の労働を、「質的に異なる具体的有用的労働」という形でのみ捉えることにもとづいて成りたっている。

マルクスは、「独立的な、そしてたがいに依存しあっていない私的諸労働の諸生産物だけが、たがいに諸商品として相対する」(『資本論』Bd. I, S. 46. 岩 41 86頁) と言っているが、この見解を、「社会的分業は商品生産の存在条件である。逆に商品生産が社会的分業の存在条件なのではないが」(同上頁) という見解の補足として述べたにすぎない。だから、彼は、これ

に続けて、「諸使用価値は、質的に異なる有用的諸労働がそれらに含まれていなければ、商品として相対することはできない。……商品生産者の社会では、独立の諸生産者の私事としてたがいに独立に営まれる有用的諸労働のこのような質的な違いが、一つの多技的体制に、社会的分業に発展する」(同上, S. 47. (1) 87頁) と言っている。すなわち、彼が商品生産者たちの労働と商品との関係を考察するときには、彼は、商品生産者たちの労働の質的な違いを、「使用価値の違い」をもたらすものとしてのみ認め、「有用的諸労働のこのような質的な違い」という形でのみ捉えているのである。そのために、彼は、異なる生産者の労働の「有用な諸形態の違い」を捨象することによってそこに残る「人間的労働という質」が、異なる生産者の労働の「同じ質」(同上, S. 50. (1) 92頁) であると考え、そして、異なる生産者の労働のこの「同じ質」が、彼らの「質的に異なる有用的労働の生産物」の同じ質、すなわち価値として表わされると考えたと言えるであろう。

しかし、ある生産者の労働と他の生産者の労働とが「質的に異なる有用的諸労働」でありうるのと同様に、同じ人のある時の労働と他の時の労働とは、「質的に異なる有用的諸労働」でありうる。だから、異なる生産者の労働の質的な違いを、彼らの労働の「有用な諸形態の違い」という形でのみ捉えることは、異なる生産者の労働の質的な違いを、同じ個人の異なる時の諸労働の質的な違いと同じ性質のものとして理解することにつながる。マルクスは言う。

「価値としては、上着と亜麻布とは同じ実体の物、同種の労働の客体的諸表現である。しかし、裁縫と織布とは質的に異なる労働である。だが、われわれの仕立屋が今日つくる上着と彼が明日つくるズボンとは、同じ個人の労働の諸変種を前提するにすぎないのとまったく同様に、同じ人が交互に裁縫したり織ったりし、したがって、これら二つの異なる労働方法が同じ個人の労働の諸変異にすぎず、まだ異なる個人の特殊な固定した諸機能ではないような社会状態がある。さらに、われわれの資本主義社会では、労働需要の変化する方向にしたがって、人間の労働の与えら

れた部分が、交互に裁縫の形態でまたは織布の形態で供給されるということは、一見して明らかである。このような労働の形態変化は、摩擦なしには行われぬかもしれないが、しかも、行われざるをえないのである。生産的活動の規定性、したがって労働の有用な性格を無視するならば、労働に残るものは、それが人間の労働力の支出であるということである。裁縫と織布とは、質的に異なる生産的活動であるとはいえ、両方ともに人間の脳、筋肉、神経、手などの生産的支出であり、この意味で両方ともに人間的労働である。それは、人間の労働力を支出する二つの異なる形態であるにすぎない。」(同上, SS. 49~50 (1) 89—90頁)

このように、マルクスは、交換において相対する「異なる個人」の労働を、「同じ個人の労働の諸変異」と同じ性質のものとして述べることによって、これらの異なる生産者の労働が、「人間の労働」という「同種の労働」の「異なる諸形態」にすぎないという命題を説明し、しかも、異なる生産物の同質の諸価値は、このような「同種の労働」の「客体的諸表現」であると言っている。この見解は、彼のより以前の著書『経済学批判』でも、「さまざまな使用価値は……さまざまな個人の活動の生産物であり、したがって個人的に異なる労働の結果である。だが、交換価値としては、それらのものは、同じ無差別な労働を、すなわち労働する者の個性が抹消されている労働を表わしている」<sup>10)</sup>と述べられている。だから、彼においては、「労働の有用な諸形態の違い」を捨象することは、「さまざまな個人」を捨象することであり、「労働する者の個性」を捨象することであった。したがって、彼が考えている「同じ質」は、人々の一定の関係によって規定される社会的な性質でなく、「人間の脳、筋肉、神経、手などの生産的支出」という生理学的な意味での同質性であった。そして、彼は、生理学的な意味での同質性が、価値という経済学的な意味での同質性として表わされると考えているのである。別のところでも、彼は、「すべての労働は、一方では生理学的な意味での人間的労働力の支出であり、そ

10) Karl Marx, „Zur Kritik der politischen Ökonomie“, Dietz Verlag Berlin, 1951, SS. 21—22. 邦訳『経済学批判』国民文庫, 17頁。訳文責は引用者にある。力点は引用者による。

して、この同じ人間的労働または抽象的人間的労働という属性において、それは商品価値を形成する」(『資本論』Bd. I, S. 51. 岩 11 94頁) と言っている。

マルクスが、交換関係を結ぶ異なる生産者の諸労働を「同じ個人の労働の諸変異」と同じ性質のものとして述べることによって、異なる生産者の諸労働は、「同じ人間的労働」の異なる諸形態であるという見解を説明したことは、彼が、この「同じ人間的労働」の最も単純で明瞭な形態は「同じ個人の労働」であると考えていたことを意味する。だから、彼は、孤島で誰とも分業せずに暮している男、ロビンソンを例にあげて、「彼の生産的諸機能の違いにもかかわらず、彼は、これらの諸機能が、同一のロビンソンの異なる活動形態であるにすぎず、したがって人間的労働の異なるやり方であるにすぎないことを知っている」(同上, S. 82. 11 149頁) と言っている。ここでは、「人間的労働」の具体的な存在形態として、「同一のロビンソン」の労働があげられているのである。しかも、彼は、「ロビンソンと彼の自製の富を構成している諸物とのあいだのすべての関係はここではきわめて単純で明瞭」であり、「しかもそのうちには価値のすべての本質的規定がふくまれている」(同上, S. 82. 11 150頁) とさえ言っているのである。

マルクスは、「経済学はロビンソン物語を愛好するから、まず彼の島におけるロビンソンに出てきてもらおう」(同上, S. 82. 11 149頁) と言って、この物語をはじめている。「経済学はロビンソン物語を愛好する」という揶揄は、『資本論』第1巻の第2版にはじめてあらわれたのであるが、彼は、さらに、この第2版にはじめて付け加えた脚注で、「リカードゥにも彼のロビンソン物語がないわけではない」(同上, S. 82. 11 150頁。注29) と言って、自分の著書『経済学批判』から、「彼は、原始漁夫と原始猟師とをすぐに商品所有者として、魚と野獣とを、それらの交換価値に対象化された労働時間に比例して、交換させている。云々」という文章を引用して



いる。これをみても分るように、マルクスは、リカードゥが交換関係を考察しているのとは違って、交換関係自体をも捨象し、他人とは何のかかわりもない孤立人の活動の中に「価値のすべての本質的規定」を見出したことに、彼自身による物語の優越点をみているのであろう。正真正銘のロビンソン物語を必要としたのは、リカードゥではなくマルクスだったのである<sup>11)</sup>。

こうして、マルクスは、交換関係にある「異なる個人」の諸労働を「同じ個人の労働の諸変異」に還元し、したがって、「労働する者の個性」および交換関係を捨象し、人と人との関係のうちではなく、人と物との関係のうちに、価値の「本質的規定」を求めた。彼は、「諸使用価値は、質的に異なる有用的諸労働がそれに含まれていなければ、商品として相対することはできない」という見解を強調しているが、それらのものがたがいに独立な「異なる個人」の労働の生産物でなければ、それらのものは商品として相対することはありえないということを無視した。「同じ個人の労働」の諸生産物が商品として相対することはありえないということは、交換において相対する「異なる個人」の質的に異なる労働を、「同じ個人の労働の諸変異」と同じ性質のものともみなすことはできないということを意味し、このことは、交換において相対する異なる生産者の労働の質的な違

11) この点について、友岡学氏は、次のように言われている。「マルクスは、経済学のロビンソン物語への愛着を揶揄した……のだが、彼もまたその最後で『ロビンソンと彼の手製の富たる諸物とのあいだの一切の連関……のうちには、価値のいっさいの本質的な諸規定が含まれている』と言うときには本気を披露しているのである。大熊信行氏は、揶揄と本気というマルクスの矛盾を正しくも指摘した功績をもつ。『マルクス経済学があらゆる経済学者のロビンソン物語を嘲評しつつ、己れ自ら一箇の典型的な……ロビンソン物語を所蔵するという矛盾は、今日において何人かによって解決されなければならないものである。』（『経済本質論』第3章マルクスのロビンソン物語、90～91ページ）しかしながら残念なことに、大熊氏は、オーストリー学派との相同性のうちに、矛盾の宥和の基礎を見出す。」（友岡学「価値と市場」鹿児島県立短期大学『商経論叢』第12号、1963年、50～51頁）

なお、以上の点については、拙稿「生産者と生産物の所有者との同一性」（前掲誌、5～8頁）を参照していただきたい。

いが、彼らの労働の「有用な諸形態の違い」には解消されえないということの意味するのである。

このようなマルクス自身における結果をみても明らかなように、異なる生産者の労働の違いを、彼らの労働の「有用な諸形態の違い」に解消することは、交換において相対する異なる生産者の諸労働を、「同じ個人の労働の諸変異」と同じ性質のものとみなすことを意味し、したがって、交換関係を捨象すること、すなわち、価値という経済学的な量を成り立たせる人と人との関係を捨象することの意味する。だから、異なる生産者の諸労働の「有用な諸形態の違い」を捨象することによってそこに残る「同じ質、人間的労働という質」は、交換関係の中での諸生産物の同質性とは無縁のものであり、したがって諸生産物の価値とは無縁のものである。

以上で明らかなように、マルクスが、交換関係を結ぶ異なる生産者の労働の「有用な諸形態の違い」を捨象することによってそこに残る「同じ人間的労働」を、「価値を形成する実体」(同上, S. 43. (c) 80頁) と考えるとき、彼は、異なる生産者の諸労働を、「同じ個人の労働の諸変異」と同じ性質のものとしてとりあつかっており、したがって、事実上、「異なる個人」の交換関係を捨象している。彼は、価値という経済学的な量が、交換関係にはかかわりなく存在しており、その「本質的規定」は、人と物との関係の中に含まれていると考えているのである。だから、「交換が商品の価値量を規制するのではなく、逆に、商品の価値量が交換関係を規制する」(同上, S. 69. (c) 127頁) ということになる。このような見解にもとづいて、あるものの「価値」という経済学的な大きさは、その生産に必要な「労働時間」という物理学的な大きさによって規定されるという見解が成りたっている。これについて検討することが、続稿の課題である。

——1973年4月18日——